「世間」に関する一考察
—日本と中国における「世間」と「世間」から見る恥の文化を中心に—

劉　潔[1)]・大橋　眞[2)]

A critical overview of "Seken"
From the stand point of "Seken" and "saving face culture" in Japan and China

Liu Jie, Makoto Owhashi

Abstract

The word "Seken" includes an extremely interesting meaning in that it is a characteristic word of Japanese culture. In contrast to the word "Shakai" that is created as the translated word for society in the Meiji restoration, "Seken" has ambiguous connections including ambiguous meaning. "Seken" is a word of Buddihism in origin, it is generally used to express the human relationship around the family. In Japan, we have made a distinction between human relationships in the family and that of around the family within the community. This distinction likely relates to the restriction of the behavior of the people in the community and formation of the typical "saving face culture" in Japan. The feature within the family members has formed the culture of "excessive reliance within the familiar members" in Japan. Although it is difficult to

[1)]青島理工大学外国語学院・[2)]徳島大学総合科学部

find a word that expresses the "Seken"i n China, the behavior of the people in Chinese is similar with that in Japan in the aspect of a continual nervousness about neighborhood gossip in the local community. The "Seken" is likely related to the role of family as a unit of organization of the religion for ancestor worship held as a main ceremony of Buddhism in Japan. In the course of changing times, Confucianism and Budddhism have been prohibited in China. In Japan, such ideologies have not been prohibited with exception to Christianity in the Edo period. A long history without prohibition by political power may be the reason why a word with its origin in Biddihism has been generally used in Japan.

1 はじめに

日本人によく知られている「世間」という言葉は、明治初頭に society の訳語として造られた「社会」という言葉と比較して、「曖昧」、「微妙」と呼ばれるような意味合いを含んでいる。「世間」と「社会」の用法の違いの例として、「世間の目」、「世間に顔向け」とは言うが、「社会の目」、「社会に顔向け」とは言わない。また、「社会を変える」、「現代社会」とは言うが、「世間を変える」、「現代世間」とは言わない。戦後、学校教育に「社会科」という教科が設けられたのを喜んだ柳田国男が、しかし、せっかく作るなら「世間勉強」という名目にしたかったなあと言ったそうである。

感覚的に言えば、日本社会では、基本的には自分と密接に何らかのかかわりがある範囲を「世間」として認識する。世間は、個々の人間を中心として、広がった人間関係の繋がりの集合体の様な概念を含むが、いわゆる自分たちが世間という言葉を使うときには、自分が世間の構成員であることまで考慮しないで、周辺の人間関係を意識することである。このように「世間」という言葉を用いるときには、自身も含めて構成員とする人間関係について、自身の視点を客観的に表現するために、自分自身も世間の構成員としてのあることを曖昧化する役割を持っている。そのために、自分も「世間」の一部になっていることには、なかなか気づかない。これは、世間という言葉の本質を考える上で興味深いことである。本論では、「世間」という言葉の特質を中心に考察し、「世間」をどう訳せばよいか、また「世間」からみる日本文化を比較することにより、その本質を探っていきたい。

さらに「世間」という世界には何が隠されているのかについて、様々な例をもとにして考察をしていく。

2　先行研究

『日本語』(上)からの引用であるが、土居健郎によれば、「日本人の生活は一番内側に身内の世界があって、これは遠慮がいらない。その次にはいろいろ窮屈な心遣いをすべき世界があり、それが世間だ」(『甘えの構造』)。

これに関連して、柳父章は『翻訳語の論理』において、次のようにまとめている。

「うちの家族一同にとって、親戚の人々は「世間」であり、そのまま親戚も含めた一同にとって、他の知人たちは「世間」である。うちの会社の人々にとって、よその会社の人々は「世間」なのである。常に「内」と「外」が存在し、緊張し合っている。「うちの者」と「よその者」との決定的な区別の例を、私たちはいくらでも知っている。「世間」が「内」の層と「外」の層とで構成されている、というよりは、「内」の層に対して、その「外」の層が「世間」なのだ、という方が適切であろう」。

このように、身内を取り巻く外側に階層的構造の世間であり、窮屈な心遣いをしなければならない世間に対して、遠慮のいらない身内の存在が日本人の精神構造と関係していると考えられてきた。

阿部謹也の『日本人の歴史意識－「世間」という視角から－』では、「世間」とは人を取り巻く人間関係の絆であり、現在と過去に付き合った全ての人々、将来付き合うであろう人を含んでいるという。また、『「世間」とは何か』では、その特異性について、世間体は個人の自由や利害に優先する、世間は暗黙のうちに日本人の行動を規定している、などをあげた。

また、芳賀やすしは『日本語の社会心理』において、個人が「世間」に対して気にするのは「世間体」であり「浮世の義理」であると述べた。さらに、「恥の文化」はそこに形成されたという結論に達した。

これらの研究において、世間について人の絆として身内の周辺だけでなく先祖と子孫を含むものとして捉えており、身内の周囲の世間だけでなく先祖や子孫を含めた「恥の文化」が、日本人の行動を規定してきたことを指摘している。

以下、これらの先行研究を踏まえて考えてみよう。

3「世間」という言葉

3．1言葉の歴史

そもそも、「世間」という言葉は、いったいいつ頃からあったのであろうか。まず「世間」という言葉そのものに注目し、史上の流れを簡単に見てみる。

「世間」という文字は、聖徳太子が語った「世間虚仮、唯仏是真」などの文によって示されるように、仏教思想による現世批判を語る言葉として、当時既に知られていた。だが、それは当時、素朴な大和の人々にとっては、きわめて高度な、先進文明の思想を語る言葉であった。素朴な人々の考え方に自ずと育ってくるものではないと考えられる。

この言葉がもっとも最初に文献に現われたのは『万葉集』であるとされ、もっとも表記は「世間」であるが、「せけん」とは読まず、「よのなか」（振り仮名）と発音するとされる。仏教経典の言葉、サンスクリット語の loka「ローカ」は「滅すべきもの」の意味で、「世間」は「ローカ」の訳語として、また、「loka に属するもの」を意味する laukika の訳語として使われ、移り変わり、破壊を免れない迷いの世界という意味である。『万葉集』に現れる用例の多くは奈良時代以後であり、特に知識人、宮廷人たちの用例が多い。

（1）世間を　何に譬へむ　朝開き　漕ぎ去にし舟の　跡なきがごと

現代語訳：世の中を何に譬えたらよいだろうか。それは、朝早く港を漕いで出て行った船が、跡にも残さないようにはかないものだ。　『万葉集』（巻三、351）沙弥満誓

（2）世間は 常なきものと 今ぞ知る 奈良の都の うつろふ 見れば

現代語訳：この世の中は無常なものだと今こそ思い知ったことだ。あの栄えていた奈良の都が荒れ果ててゆくのを見ると。　『万葉集』（巻六、1045）大伴家持

（3）天地の　遠き初めよ　世間は　常なきものと　語り継ぎ流らへ来たれ　天の原　振り放け見れば　照る月も　満ち欠けしけり　あしひきの　山の木末も　春されば　花咲きにほひ　秋づけば　露霜負ひて　風交り　もみち散りけり　うつせみも　かくのみならし　紅の　色もうつろひ　ぬばたまの　黒髪変り　朝の笑み　夕変らひ　吹く風の　見えぬがごとく　行く水の　止まらぬごとく　常もなく　うつろふ見れば　にはたづみ　流るる涙　留めかねつも

現代語訳：遥か遠い天地の始まりの時から、世の中は無常であると、ずっと語り継がれて

きた。空を仰ぎ見れば、輝く月も満ち欠けし、山の樹々の梢も、春になれば花が咲き匂い、秋が深まれば露や霜を身に受け、風まじりに紅葉は散っていく。現世の人もこのようでしかあり得ないのか、紅顔もやがて衰え、黒々とした髪も白くなり、朝の笑顔は夕方には失われ、吹く風が決して目に留まらぬように、流れ去る水が決して止まらないように、無常に変わり行くさまを見れば、庭の溜まり水のように溢れ出る涙はとどめようもない。　『万葉集』(巻十九、4160) 大伴家持

また、解脱を示す聖に対する俗の意味で使われている。そこから、いわゆる俗世、つまり、人々が普段生活する現世社会やこの世、また、生活している空間、天と地の間など、世の中全体を指す言葉として、仏教的意味と重なってくる。『万葉集』の中でも、穢土としての「世間」、すなわち「生老病死」の世界として使われている。

(4) 世間を　厭しと恥しと　思へども　飛び立ちかねつ　鳥にしあらねば

現代語訳:この世の中をいやな所、身も細るような所と思う次第ですが、捨ててどこかへ飛び去ることもできません。私ども人間は所詮鳥ではありませんので。(俗世解脱のための知恵を、仏教では鳥に譬えている)　『万葉集』(巻五、893) 山上憶良

(5) たまきはる　うちの限りは　平らけく安くもあらむを　事もなく　喪もなくもあらむを　世間の厭けく辛けく　いとのきて　痛き創には　辛塩を　注くちふがごとく　ますますも　重き馬荷に　表荷打つと　いふことのごと　老いにてある　我が身の上に　病をと　加へてあれば

現代語訳:この世に生きてある限りは(仏典には人間界に住む人の寿命は百二十年だという) 無事平穏でありたいのに、障害も不幸もなく過ごしたいのに、世の中の憂鬱で辛いことには、ひどく痛い傷に辛塩をふりかけるという諺、ひどく重い馬荷に上荷をどさりと重ね載せるという諺のように、老いさらばえた我が身の上に病魔まで背負わされている。　『万葉集』(巻五、897) 山上憶良

そして、江戸時代になってから、日々生活する周りの社会やその状況、人々とのまじわりといった意味で、井原西鶴をはじめとする浮世草子の中で使われるようになる。この頃からすでに、現在と同じように、個人は「世間」との関係の中で生まれて、「世間」という枠組に生きているというふうにとらえられている。(用例を２．２であげることにする。)

さて、辞書における解釈を一応述べておこう。『大辞林 第二版』では(1)人々が互いにかかわりあって生活している場。世の中。また世の中の人々。(2)社会での、交際や活動の範囲。(3)lokaの訳語。変化してやまない迷いの世界。生きもの（有情世間）とその生活の場としての国土（器世間）などがある。(4)自分の周りの空間。あたり。(5)生活の手段。身代（しんだい）。財産。(6)人とまじわること。世間づきあい。(7)（僧に対して）俗世の人。一般の人。となっている。

『角川国語辞典』では(1)人が集まって生活する世界。世の中。(2)実社会。「ーに出る」一般の社会。(3)自分以外の一般の人々。「ーの口がうるさい」。(4)交際の範囲。自分の活動する範囲。「ーが広い」。「ーをせまくする」。となっている。

『新明解国語辞典　第六版』では自分と共に世界を形作る、一般の人びと。〔仏教用語としては人間社会の意。例、「出ー」〕「ーの目が厳しい／ーを驚かせる／ーがうるさい／ーが狭い／ー〔＝世の中〕を騒がす／ー様〔＝よその人たち〕に対して申し訳が無い／ーが広い〔＝aつきあいが広い。b物知りだ。〕／ー晴れて〔ほかの人たちに気がね無く。公然と〕夫婦となる」。となっている。

つまり、この言葉は古来から日本で使われ、仏教的な意味を帯びて、現在まで生き延びている。本文では、主に『新明解国語辞典　第六版』によって示される「世間」の意味に着目して考えていく。それに、上に含まれた「人々が互いにかかわりあって生活している場」「社会での、交際や活動の範囲」「自分の周りの空間」「人とまじわること」「交際の範囲」「自分の活動する範囲」……などの語句は、これから述べようとする事実を予示するキーワードとしても意味深いものがある。

3．2「世間」の用例

以下、「世間」のいくつかの用例を見ていく。

（6）世間体ばかり（を取り繕うて）、皆偽りの世の中に、時雨降り行く奈良坂や、春日の里に曝しの買問屋して、有徳人（裕福者）松屋の何某とてありしが、昔は今の秋田屋、くれ屋に勝りて、世盛りの八重桜、ここの都に花を遣って、春を豊かに暮され、所酒の辛口、鱶の刺身を好み、その身栄花に明かし、この家次第に衰へ、天命そ知る年になりて、平生の不養生にて頓死をせられける。妻子に大分の借銭を残し、これを譲られける。

井原西鶴　『日本永代蔵』（巻一）

注:「世間体」は、世間の人に対する体裁である。即ち、世間での付き合いに対する見栄、面目である。用例（6）では、贅沢な生活を送っていた裕福者の松屋は、対世間的な見栄を張りたがる結果、平生の不養生で頓死した。

（7）考えてみると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励しているように思う。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じているらしい。たまに正直な純粋な人を見ると、坊っちゃんだの小僧だのと難癖をつけて軽蔑する。それじゃ小学校や中学校で嘘をつくな、正直にしろと倫理の先生が教えない方がいい。いっそ思い切って学校で嘘をつく法とか、人を信じない術とか、人を乗せる策を教授する方が、世のためにも当人のためにもなるだろう。赤シャツがホホホホと笑ったのは、おれの単純なのを笑ったのだ。単純や真率が笑われる世の中じゃ仕様がない。　夏目漱石　『坊っちゃん』五

（8）驚いたのは、おれがいか銀の座敷を引き払うと、翌日から入れ違いに野だが平気な顔をして、おれの居た部屋を占領した事だ。さすがのおれもこれにはあきれた。世の中はいかさま師ばかりで、お互いに乗せっこをしているのかも知れない。いやになった。
　世間がこんなものなら、おれも負けない気で、世間並みにしなくちゃ、遣りきれない訳になる。　夏目漱石　『坊っちゃん』七

（9）十四にもなってぶらぶら子供を遊ばして置く家があると、「あれでは貧乏をするのも当り前だ。親たちの心得が悪い」と世間の口がうるさかったもの――だから、十一、二歳は奉公の適期であって、それから十年間の年季奉公。それが明けると、一年の礼奉公――それを勤め上げないものは碌でなしで、取るにも足らぬヤクザ者として町内でも擯斥されたものでありました。　高村光雲『幕末維新懐古談』「私の子供の時のはなし」

（１０）「うむ。それもいいが、なるべく世間の噂にならぬように」「はは」千坂は、この頑固な爺と気短な内匠頭とでは、喧嘩になるのはもっともだと思った。しかし、この頑固さを、世間でいうように、強欲とか吝嗇とかに片づけてしまうのは当らないと思った。
菊池寛　『吉良上野の立場』

（１１）私は田舎のいわゆる金持ちと云われる家に生れました。たくさんの兄や姉があり

まして、その末ッ子として、まず何不自由なく育ちました。その為に世間知らずの非常なはにかみやになって終いました。この私のはにかみが何か他人からみると自分がそれを誇っているように見られやしないかと気にしています。

私は殆ど他人には満足に口もきけないほどの弱い性格で、従って生活力も零に近いと自覚して、幼少より今迄すごして来ました。　　太宰治　『わが半生を語る』

（１２）（１７年に及び強いられた潜行、獄中生活の後、滝田修の名を捨て12年の時を経た今、沈黙を破って目に映る世間の、人間の姿を語る。）

世間というと、何か茫漠たる大きさや広がりをもつものと感じてしまうきらいがあるが、それは一般社会の幻影を重ねて錯覚している、錯覚させられているにすぎないのではないか。実際の世間とはもっと単純明快で、直接に知り合っている人たちのことであろう。だから付き合いの幅にも依るけれど、普通の人の世間はたかだか十人、二十人、数十人位のものだと思う。

その、たかだかの数十人の世間に対して肩身が狭い、顔向けできない、迷惑をかける、と引け目を感じる、感じてしまう、感じないわけにはいかない。これはいったいどういうことなのだろうか。繰り返す。世間といえば、自分を直接に知ってくれている人たちのことである。あらまほしきは、お互いに分かり合える、分かち合える間柄、理解共有の関係のはずであろう。ところが、実際はまったく逆の、遠慮、無理解、牽制、非難、排除、それが世間である。世間なるものが、その種の寒々とした、貧しい、浅ましい関係であるから、「世間に対する迷惑」がこの国の人たちの、ほとんど強迫観念になっているのではないか。

親は,子どもがまだほんの幼児の頃から、「世間に迷惑をかけたらあかんで」、「世間に後ろ指さされるようなことしたらあかんで」、と耳にたこができるくらい言って聞かせる。

言うところの迷惑とは、とどのつまりどういうことか。私見によれば、要するに「過ぎる」ことなのではないか。出過ぎても入り過ぎても行き過ぎても、正し過ぎても長過ぎても悪過ぎても、美し過ぎても醜過ぎても、大き過ぎても小さ過ぎても、何事によら

ず「過ぎる」と宜しくない。過ぎるとどうなるか。どんな目にあわされるかは学校でも会社でも近所でも、いや家庭の中ですら、だれもが見聞きし体験して知っている。

知情意のいずれにおいても過ぎないように、過ぎないようにと、前後左右の世間様の顔色を窺い、迷惑を慮って生きなければならないとは、度し難いまでに世間に侵されたこの国の人の世である。　(元) 滝田修　『泪の旅人-ならず者出獄後記』

3．3「世間」の特質

次に、「世間」について、どのような特質があるのかを考えてみる。

第一、阿部氏の定義によれば、「世間とは、身内以外で、自分が仕事や趣味や出身地や出身校などを通して関わっている、互いに顔見知りの人間関係のことである。したがって、一人一人世間は異なっており、世間が広い人もいれば狭い人もいる」ということになる。つまり、日本人は「世間」という言葉を口にするとき、そこから直ちに、或る限られた人の顔つきを如実に思い描くことができるであろう。親戚の人々、会社の人々、サークルの人々、同窓会の人々、同郷の友人たち、御恩になったり、世話になったり、またなられたりする人々。そして、ずっと影が薄くなって、隣近所の人々、などである。ですから、「世間」は人の置かれた状況によってさまざまで、人によって違うものである。例えば、「あの人、世間が広い(狭い)」という言い方がある。「世間が違う」は日ごろの生活圏が重なり合わないということをさす。

第二、「世間」とは、あくまでも血縁や地縁、職縁からなる閉鎖社会であり、そこに暮らす「運命共同体」のようなもので、人はその中で生まれ育ち生活し仕事している。その特徴として、阿部氏は長幼の序と贈与、互酬の原理を上げる。長幼の序といえば、年功序列や終身雇用の制度はその例である。有能でない人は世間の掟を守っていれば排除されないが、有能な人はそれなりの地位を得るわけではない。そして、家族内と他人同士、内と外、上と下を区別する語感がつきまとう授受関係の動詞や敬語も一つの例であろうと思う。

また、贈与、互酬の実例として、お歳暮、お中元などのとき、贈答儀礼によって相互の関係が更新、持続されることがあげられる。

第三、「世間」では、自分との関係性の中に他者を位置づけているため、「世間」の目を意識しながら暮らしている。「出る杭は打たれる」という諺がある。「世間」の中では目立たないことが大切であり、控えめな態度が求められているからである。例えば、皆とともに行動する時は皆と合わせようとするし、意見を聞かれた時は他人の意見を聞きながら自分の意見をそれに合わせたりする。つまり、周りにあわせる協調的な生き方が求められている。「世間」は個人の行動を拘束している一方、「世間」における個人の個性は、十分な形で伸ばすことができないとも考えられる。

第四、個人は「世間」から排除されることを恐れて暮らし、「世間」の中の何の集団の一員として巻き込まれるか、その個人の位置づけを気にしながら生活している。また、人間交際のとき、本人の質ではなく、所属を重視するであろう。相手がどのような「世間」に属しているか(出身、会社、地位など)をも問題にする。

「渡る世間に鬼はない」というのは、お互いに顔を、名前を知り、気心が知れてくれば、そこに仲間意識が生まれ、善意の交際が始まるという考え方によるであろう。「世間」が違いするぎると、親しくなる可能性も低くなるはずである。

第五、「世間」は個人の意志によって作られたものではなく、厳然として存在している。用例（7）からみれば、「世間」は人が悪くなることを奨励し、正直な、純粋な人を軽蔑するようである。赤シャツは学校という「世間」の中で生きているのに対して、坊っちゃんは「世間」を気にしない正直な、純粋な人である。もちろん、読者は赤シャツの仲間であることをうすうす感じ取って、坊ちゃんに肩入れしている。だが、自分が赤シャツのように「世間」の中で生きていることを感じていない人もいないであろう。坊ちゃんに味方しているが、「世間」に対する無力感も伴っている。また、「世間体のための結婚」という言い方からも、「世間」に対する無力感が感じられる。

第六、「世間」における個人の姿を考えると、おそらく「世間」向きの顔や発言と自分の内面の思いを区別して振る舞うであろう。そこで、個人の外面と内面が形成されるわけである。即ち、本音と建前が形成されるのである。言い換えれば、日本の個人は、「世間」との関係の中で形成される。その特徴として、個人は曖昧であるように思われる。

4「世間」の訳語

「世間」の訳語については『日漢大辞典』は1(佛教语)世间。2社会。世间。世人。3交往、交际范围。としている。以下、2と3の訳語を考えてみよう。

4．1「世間」と「社会」

昔、漢字発祥の国、中国で「社」も「会」も生まれた。しかし、古代中国で使われていた「社」は、春秋戦国時代では「土地神」を意味していた。原始集落はその「社」を中心に作られて、のちに、行政区画としての「社」が登場した。中国で「社会」という語が登場するのは、「日宋貿易」のころであった。それは「社」に「会」するという意味の「社会」であった。今日言うところの中国語の「社会」という言葉は、日清戦争の後、日本から漢字発祥の中国へ逆輸入されたものである。

日本語の「社会」は明治10年頃に「society」の訳語として作られた言葉だという。正確に言うと、「社會（会）」の初見は、文政9年の青地林宗訳の『輿地誌略』で、ただし、この「社會（会）」は修道院、教団、会派の意味で使われていた。明治に入って「社会」は「society」の訳語として定着し、明治10年前後に普及し始めた。

しかし、日本語における「世間」と「社会」とは違う。その区別は次のように述べている。

第一、「社会」という言葉は明治以降に「society」の訳語として生まれたのに対して、「世間」という言葉は千年前後も日本人になじんだ和製漢語である。さて、辞書における「世間」と「社会」の意味を考える。「世間」は前述のように、人々とのまじわり、付き合いを意味する言葉として日本人の心にはフィットする。「社会」について『新明解国語辞典　第六版』では広い意味での共同生活を営む人々の集団。〔狭義では、特定の仲間意識を持つ人たちの集団を指す。例、「芸術家の－」〕「－の底辺に生きる人たち／－に（へ）出る〔＝今まで生徒ないし学生であった者が勤めはじめる〕／－の窓／－活動・－生活・－問題・地域－」。となっている。日本社会では「世間」と違い、「社会」という言葉には実感が薄いと言えよう。

第二、「社会」は明治以降、文章では使われている。「世間」は明治以降、文章から消えたが、会話の中ではしばしば使われている。

第三、「社会」は抽象的であれば、「世間」は具体的である。「社会」は人間の共同生活の総称である。「世間」は顔が見えたりして、実際につきあいがある人々の関係をさす。

第四、「社会」は「世間」より広い範囲をさすと言えよう。「世間」は「社会」のような普遍性は持たず、人の置かれた千差万別な状況の特殊性、個性を常に引きずっている。

第五、「社会」は、個人が異なることを前提として、独立した個人がルールによって共存していく場所である。個人の意思に基づいて「社会」の在り方が決まる。それに対して、「個性的に生きることの妨げ」を考えてみると「世間」という言葉に行き着く。「世間」は個人の意思によって作られるものではないし、自由意志で作っている集まりではない。厳然として存在して、一体化が求められている。日本では、政治家や財界人が何か不祥事をおこしたとき、「自分は無実だが、世間を騒がせて申し訳ない」と謝罪する光景をしばしば見かける。この場合の「世間」は「社会」ではない。

第六、「社会」は「良いもの」、「世間」は「悪いもの」としてとらえられている。「世間のために」と言えば、あとは「ざるをえない」など、マイナス的な表現が続く。しかし、「社会のために」と言えば、あとには「献身する」のようなプラス的な表現が続く。

第七、諺、慣用語というものは明治以前、成立したのが多いため、明治以降、日本語に加わった「社会」が諺、慣用語に用いられないのも当然のことである。これに対して、「世間」を含む諺、慣用語は山ほどある。それらの「世間」は「社会」をもって置き換えることのできない概念である。

一般より劣らぬことであるという表現として「世間並み」と言うが、「社会並み」とは言わない。また、「世間知らず」はあるが、「社会知らず」はない。たとえ「社会知らず」という言い方があっても、それは社会を科学的にまたは常識的にとらえる能力を欠く人間のことになる。一方、「世間知らず」は日本人の社会を構成する伝統的意識の持ち主たちの心理の機微を解せず、「世渡り」の知恵を欠く個人のことである。「世間はせまい」と言っても「社会はせまい」とは言えないところにも意味がある。「世間」は人と人を結ぶまじわりであるので、意外なところに結ばれたのを発見すると「世間はせまい」と感嘆す

ることになる。

「社会」に関しては、「社会改革」「社会保障」「社会福祉」……などの語が数多く存在するが、「世間改革」「世間保障」「世間福祉」……はない。「世間」は契約に基づいて形成された法的な存在ではなく、自然発生したままの、暗黙に自分を監視する存在にほかならない。

以上、「世間」と「社会」との決定的な相違点は、他者を自分との関係性の中で認識するがどうかということではないかと思う。「世間」とは、自己との関係性の中にある社会であり、今日言うところの「社会」とは、そうしたことが考慮されず、常に他者を見知らぬ「あかの他人」として見ていることにあるであろう。そのために、日本から逆輸入された中国語の「社会」に訳すのが不適当であると思う。

4．2「世間」と「世间」、「世人」

常に「世間」を「世の中」と同じものとしてとらえられがちであろうし、さらに、中国語の「世间」に訳すことが多い。

「世の中」について、『新明解国語辞典　第六版』は、「社会人として生きる個個の人間が、だれしもそこから逃げることのできない宿命を負わされているこの世。一般に、そこには複雑な人間関係がもたらす矛盾とか政治、経済の動きによる変化とかが見られ、許容しうる面と怒り、失望を抱かせるとかが混在するととらえられる。」としている。やはり「世間」より「世の中」のほうは広い範囲をさすと思われる。用例の（7）、（8）における「世間」は、「世の中」というより、むしろ坊っちゃんの日々生活する周りの状況を代表する「学校」のほうをさすのではないかと思われる。

そして、中国語の「世间」に訳したら、「世間」の個人差や厳しさなどの実感が湧いてなさそうである。

また、「世人」に訳すことがあるが、「世间的人」「一般的人」という意味で、やはりその訳語から、いつも「世間」に気をつかっている緊張感が感じられない。

4．3「世間」の訳語について

以上、論じてきた「世間」という言葉は、日本人の意識の中で深く根を張った概念である。日本人の伝統的な心理の機微が表われている言葉として、中国語に訳しにくいと思う。強いて訳せば、「人々とのまじわり」「付き合い」を重んずるという点を考える上で、場合

によっては「交往」「交际范围」「社会关系」「交际交道」に訳せばいいと思う。

5「世間」からみる恥の文化

「世間」という言葉にかくれた日本人の心理は、以上述べてきたことから浮かび出るように、仲間の顔、よそ者の顔が意識され、かれらの目に映る自分の姿を意識しては気をつかいつづける。場合によっては「世渡り」の知恵を欠く人は社会行動にかけては「義理」を欠くことも多く、「一人前」でないと見られやすい。それは、「恥」の因にもなる大事であろう。では、だれに対して自分が恥と感じるか、その対象は、自分が属している「世間」である。つまり「世間体がわるい」ということである。

「世間様」「世間の目」「世間が許さない」「世間に顔見せできない」「広い世間を狭くする」「世間に申し開きをする」「世間に背を向ける」「世間知らず」「世間の鼻つまみ者」という言葉が、これまで普通に使われていたことからわかるように、人はその与えられた「世間」の中で、好むか好まないかに関わらず、「世間」に背いてはいけないと教えられてきたのである。「悪事をはたらく」とは、神に背くことでも、仏に背くことでもなく、「世間」に背くことなのである。従って、その報いは天罰でも仏罰でもなく、「世間からの追放」である。即ち「自分の立場」を失うことであり、これは仕事も人間関係もすべて失うことを意味する。だが、子供はまだ経験が少なく、そうしたことへの理解が少ない、即ち「世間知らず」だから、大目に見てもらえる。逆に言えば、「世間」を離れてしまえば、はずかしいと思う範囲が小さくなるか、またはなくなる。「旅の恥はかきすて」という諺は、それを示したものにほかならない。自分の属する「世間」から離れてしまえば、恥をかくことなど何でもないという気楽な気分になる。ですから、「恥」とか「恥と感じない」とかの基準は、自己の内面に確固とした普遍的な規範意識として定着しているわけではなく、「世間で共有されている価値観」の中にある。従って、恥は、その「共有されている価値観」に逆らうことに由来する。「世間」の否定的な評価に由来する。恥は、「世間」との関係の中で感じる心理的な負い目であると言えよう。

2004年2月24日（火）付けの日本経済新聞に掲載されている『日本文化の伝承を考える＝世間を配慮した言動』という文章に、「日本にいた頃の私は、顎鬚を生やし、ジーンズ姿だったので、母から「そんな格好で外に出ると体裁が悪い」と言われたものだ。また、犯

罪者を出した家族が記者のインタビューに、「世間に顔向けが出来ない」と答えているのを日本のテレビ・新聞のマスコミでよくみかける。一人の恥は家や集団の恥とする。この様な世間を配慮した言動は日本の社会でごく普通に見られる現象である。」「日本人は「世間を配慮して生活している」からこそ日本は治安が安定しているとも言える。」とある。確かに、「世間」への配慮は強力な規範力の源となる。つまり、「恥知らずなことをしてはならない」という規範が根強くあり、これが結局、日本における犯罪行為を少ないものにし、ひいては社会の治安を維持することに貢献してきたであろう。

このように、「世間」の意識の深く染み込んだ日本人は、さまざまなデリケートな感情をはたらかせて生活している。「恥の文化」はそこに形成されたと言えよう。

ところが、戦後アメリカ民主主義の流入により、この伝統的な「世間」の意識がその実体を喪失してしまったと考えられる。最近、車内での化粧、駅ホームや路上でしゃがみ込み、コンビニの前で座り込んでの飲食おしゃべり、こういった若者の姿を日常的に見かける。「別に法律に違反するわけでなければ、自分のやりたいことはやってもいいはずだ。たとえ自分のやっていることで他人が迷惑に感じたって、そんなこと自分には関係ない。」という考えからであろう。簡単に言えば、「これは自分の勝手だ。あなたには関係ない」「私には自由がある」ということになる。

つまり、これまで気にかけてきたのは「世間で恥をかかない」「世間体を失わない」ということであり、自分の恥も名誉も「世間」を通してのみ実現すると考えていたのであるが、この「世間」が希薄化してしまった結果、「恥」の観念も希薄化し、「他人に迷惑をかける」ということが現実問題としてそもそもどういうことなのか、全く想像力がはたらかなくなってしまったのではないかと考えられる。

今では、「世間」という言葉はあまり使われず、「社会」とか「他人」という言葉がそれに取って代わったかのように見える。頻繁に使われるようになった「社会」というあまりに漠然としたイメージからは、自分との関係性の中で他者の存在を認識する心理回路がはたらかなくなっていると考えられる。

6　中国と日本における「世間」

現在の中国においては、「世間」はどのように存在しているのかについて、日本との比較

をしながら考察して行く。現在の中国には「世間」に相当する言葉は、「世間万物」として、俗世間の意味で使われる。これは、仏教用語としての「世間」と同義的な意味である。中国において、日本で汎用されている「世間」に相当するような適当な言葉は見つけることは難しい。韓国においても同様に、日本で使われている世間に相当する言葉は、汎用語の中には見つからない。しかしながら、他人の目を気にして行動することの意味に関しては、日中韓で共通した理解があり、人間関係を基本とした考え方に共通点が見られる。

第一、　日本の地域の村社会の原点とも言える中世の惣村、郷村からの流れをくむと考えられる町内会、青年団、婦人会などの地域社会の組織は、もっとも身近な世間である。この場合内なる世界である家の周囲に外の世界が存在している。

第二、　中国の都市部では、このような地域の単位を社区と称している。社区は、現在中国共産党の末端組織として機能している。中国の都市部において、近代になってから新たに整備されたものであり、人間社会の組織の中でも、その機能性に重点が置かれている。

第三、　中世以来、日本の惣村、郷村の寄り合い等は自治組織であると共に、鎮守の社などの祭祀を執り行う宗教組織として機能してきた。このようにして、村人の精神面の繋がりを保つ役割を担ってきた。家制度のなかで、家長は家の代表者としてこれに参加し、世間との絆を保ってきた。神仏習合の時代にあっては、仏教用語である世間が、村社会の俗世の部分である人間関係を現すことは理にかなっている面がある。これに対して、中国の社区は、自治組織としての管理機能を担ってきたが、宗教組織としての機能は持っていない。

第四、　日本の村社会では、「家」が村の住民組織の基本単位として存在していた。個人は、この「家」という組織に帰属するのであり、先祖と子孫との繋がりも、「家」を基本として築かれている。このために、「家」と世間との繋がりは、その家の先祖や子孫とも「家」を通して関係が保たれることになる。中国の「家」制度は、多様であるが、「家」を社区の基本単位とする形ではなく、個人を基本単位としている。ただし便宜的に「家」が基本単位として使われることもある。

第五、　日本の村社会における「家」と「家」との関係は、それぞれの先祖や子孫と繋がった組織間の関係であり、祖先崇拝のアミニズム的な関係の横の接点とも言える。「家」の中では、家長は祭祀を司り、祖先との繋がりにおいて中心的役割を担う。これと同時に子孫とのと繋がりにおいても、中心的な位置付けになる。そのための宗教的施設である、仏壇や神棚などが各家の中に置かれている。これは、家が一つの宗教組織として独立性と上部の宗教組織の末端組織として機能していることでもある。一方中国においても家長が祭祀をつとめることがあるが、家の中に宗教的施設が置かれることは少ない。このために、家が宗教組織の単位として独立した機能をもっているとは必ずしも言えないが、家族が共に行動して宗教行事に参加する例は多い。祖先と子孫における繋がりを意識する思想は中国にも共通して存在する。その点では、中国にも「恥」の文化が共通して存在すると言えるかも知れない。

第六、　日本の村社会においては、家の中は内なる世界であり、家の外の世界とは、家を代表してつきあうことになる。このために、外の世界とのつきあいにおいて「恥」は、世代を超えたものとして扱われることになる。中国においては、必ずしも「家」が祖先崇拝の宗教組織の単位として機能していないことが普通である。そのために、恥は個人や当代のレベルに限定される。恥の文化の組織的な役割で見ると、中国では個人的な色彩が強く、日本に比べると組織性が薄いと言えるかも知れない。

第七、　このように。日本における「家」制度の世界では、「家」の外は世間であり、世間の目を気にしながら、末代までの恥とならぬように気を配りながら付き合いをしていく必要があった。「家」は、「恥」を気にしながら周囲の世界とある種の緊張関係を持ちながら世間との付き合いを持つともに、「家」中の「身内」対しては。「甘え」の許される内なる世界が存在してした。「家内」という表現は、現代の日本でも使われているが、中国ではこのような言い方は一般的ではない。

第八、　「恥」の文化と「甘え」の文化を内包する「世間」という表現は、日本の文化の一面を表現する言葉として、現代に於いても汎用されている。この背景には、意識されることが少ない日本の宗教組織の単位でもある家制度があり、このような背景を基にして家の外の人間関係を表現する言葉として頻用されたのではないだろうか？戦後「家」制度

が民法上なくなり、個人主義が浸透するにつれて、世間に対する「恥」という考え方は薄れつつある。現在でも、仲間の中と外を区別する習慣は、人間関係の中に存在している。

第九、 現在の中国においても、特に農村部においては、日本と同じように他人のうわさ話に花を咲かせることや、他人の目を気にしながら行動することはごく自然に見られることである。しかし、このような人間関係を仏教用語としての俗世間という表現は用いられなかったようである。「一期一会」「いただきます」「もったいない」などの仏教に由来する言葉も、中国では一般的に使われていない。

第十、 中国では、革命において、儒教や仏教などの宗教が否定されたことがあった。国家統一の言語である現在の中国語が標準語として普及する過程に於いて、地域的に使用されていたかも知れない宗教用語は、標準語に於いては汎用語でなくなった可能性もある。日本においては、皇室を基準の考える限りに於いては、中国のような明確な政権交代はなく、江戸時代にキリスト教が弾圧された以外は、仏教などの宗教が否定されたことはほとんどない。そのために、仏教用語が、それ自身が仏教用語であることに気がつかないままに使用されるほど汎用語として定着している。このような、両国の歴史における政権交代と政権の宗教政策の違いが、現代の汎用語の中での宗教用語の使われ方に差を生み出した一因ではないだろうか。

7　おわりに

以上、「世間」という言語の姿を追いかけながら、日本と中国の「世間」と「世間」からみる恥の文化について見てきた。つまり、「世間」は日本人の考えや行動に大きな影響を与えていることは否めない。感覚的に言うなら、「世間」は日本人にとって心理的、因襲的存在であろうと思う。この論文に関する資料を読んでいるうちは、「世間」は何か特別なものではないかと考えていた。考えれば考えるほど、「世間」は実に奥行きの深い言葉であり、どんなに社会が変遷していくとしても、伝統的意識がその国のかけがえのない文化の一部分として、受け継がれていくのではないかと思う。「世間」の裏にひそんでいる文化はあまりにも豊かで、日本と中国の関係を探る上で興味深い。今後の課題としてその研究を続けていきたい。

謝辞　ご教示いただいた青島理工大学、鄭愛軍, 徳島大学、Steve Fukuda 両先生に感謝します。

参考文献

柳父　章（1972）　『翻訳語の論理』－言語にみる日本文化の構造　法政大学出版局
阿部 謹也（2004）　『日本人の歴史意識－「世間」という視角から－』　岩波新書
阿部 謹也（1995）　『「世間」とは何か』　講談社
芳賀　やすし（1998）『日本語の社会心理』　人間の科学社
金田一春彦(2006)　『日本語』(上)　岩波新書
青木生子　井手至　等校注（昭和五十一年）新潮日本古典集成『万葉集』一　新潮社
青木生子　井手至　等校注（昭和五十三年）新潮日本古典集成『万葉集』二　新潮社
青木生子　井手至　等校注（昭和五十九年）新潮日本古典集成『万葉集』五　新潮社
村田　穆　校注　（昭和五十八年）新潮日本古典集成『日本永代蔵』　新潮社
松村明 編　(1995)　『大辞林　第二版』　三省堂
久松潜一　佐藤謙三　編（1969）　『角川国語辞典』　角川書店
山田忠雄　柴田武　酒井憲二　倉持保男　山田明雄編（2004）
『新明解国語辞典　第六版』三省堂
『日漢大辞典』(2002)　上海译文出版社　日本讲谈社
夏目漱石著　林少華訳（2008）　『哥儿 坊っちゃん』　中国宇航出版社
用例（９）　www.aozora.gr.jp/cards/000270/files/1547_21470.html
用例（１０）www.aozora.gr.jp/cards/000083/files/487_19887.html
用例（１１）www.aozora.gr.jp/cards/000035/files/1601_18118.html
用例（１２）www.aozora.gr.jp/cards/001095/files/42615_21291.html
用例（１３）www.zorro-me.com/meigetsudou/namida01%5D.html
早稲田大学 2000 年度卒業論文集『世間考』www.kt.rim.or.jp/~igeta/gr00/index.html
「社会」と「個人」について考える homepage2.nifty.com/01241104/starthp/subpage17.html
「世間」と「社会」はどう違うか？homepage1.nifty.com/forty-sixer/seken.htm

『日本文化の伝承を考える＝世間を配慮した言動』
www.nikkeyshimbun.com.br/040224-62colonia.html
昨今の「武士道」の流行をどう評価するか
www.keiomcc.net/terakoya/img_report/report20060808.pdf